令和６年度第３回東京藝術大学特別講義（DOOR）受講感想【一部】

天草市立本渡看護専門学校

１年生　令和６年７月３日（水）

２年生　令和６年７月２日（火）

演題	**ハンセン病療養所から考える芸術**
講師	**山川　冬樹（やまかわ　ふゆき）氏**　美術家、ホーメイ歌手、秋田公立美術大学准教授 現代美術家、ホーメイ歌手。自らの声・身体を媒体に視覚、聴覚、皮膚感覚に訴えかける表現で、音楽／現代美術／舞台芸術の境界を超えて活動。己の身体をテクノロジーによって音や光に拡張するパフォーマンスや、南シベリアの伝統歌唱「ホーメイ」を得意とし、これまでに 16 カ国で公演を行う。現代美術の分野では、マスメディアと個人をめぐる記憶を扱ったインスタレーション『The Voice-over』や、「パ」という音節の所有権を販売することで成立するパフォーマンス『「パ」日誌メント』などを発表。瀬戸内国際芸術祭への参加をきっかけに 2015 年より、ハンセン病療養所大島青松園でのフィールドワークに取り組みはじめ、作品を発表。大島青松園の常設展示となっている。 現在、秋田公立美術大学大学院複合芸術研究科アーツ&ルーツ専攻准教授。

１年　①

ハンセン病っていう病気は、ここ２～３年でよくニュースで耳にするようになった。昔からある病、感染すること、迫害を受けていたことなど、ぼんやりとしたイメージであった。講義を受け、病で死ぬことはなくとも、社会的な死を宣告され、現在に至るまで長い戦いを強いられている。その中でもハンセン病になっただけで、人種差別に近い扱いを受けた事実は消すことはできない。自分達ができることは、病を理解し、療養所で生活されている方が何を発信しているかを受け止めることだと思う。療養所での文化・芸術はどのような意味をもつのか、療養者の方車の表現は、他者での繋がり、架け橋、自分の生存を確認するため、講義で習ったマズローの欲求の通りだと思った。芸術＝人として生きるために必要なことと感じた。

１年　②

ハンセン病は社会的な死を意味するという言葉がとても印象に残っています。動物としては生きているが、人間としては死んでしまう、周りからの差別などで生きる意味を失ってしまうのだなと感じました。療養所での「芸術活動」や「文化活動」は自分の実存を確認するための鏡だったり、後世に自分の生の痕跡を残すための遺伝子の代わりだったということを学びました。絵や音楽以外でも、自分の家の庭を自由に作り変えることも「芸術」・「文化」であるということを初めて気づかされました。生きることを強要された土地を、誰にも犯されず逆に引きこもりながら自分の世界を作りかえ切り開いていくことで、奪われた時間を取り戻していったのだなと感じました。また、最後に「共感」についてもお話をされていて、相手の気持ちや考えを分かったつもりにならないということを大切にしているということが印象に残りました。これは、看護・医療現場でも活かせることだと思いました。

２年　①

ハンセン病という中々日の目を浴びることがない疾患を抱える人々と、芸術を通じて関わり合い、島でのアートプロジェクトを大きく拡げていった山川さんの働きが凄いと思った。また、自分がハンセン病の人々に芸術を教えるのみでなく、山川さん自身も彼らの創る詩や写真、音楽、美術を吸収し、彼らのアート活動を世に広めていく姿勢にも感銘を受けた。私もハンセン病患者の人々に対して「彼らはハンセン病だから…」と曲がった先入観を持って蔑視することなく、彼らにしかない視点や彼らにしか創れない芸術観をリスペクトし、学んでいく気持ちを忘れずに大切にしていたいと思った。また、ハンセン病に限らず日の目を浴びる事の少ない様々な人々、存在にスポットを当て、視野を広げていく心持ちを持っていきたいと思った。

２年　②

小学校・中学校・高校でハンセン病のことについて学ぶ機会がありました。しかし、今回の講義で強制隔離され、尊厳を奪われながらも生きた人たちの尊厳の回復を創作や文化芸術活動が行われているということを初めて知りました。特に「芸術が生存と直接関係のない余剰行為などではなく、人間が人間として生きるために不可欠な活動である」という言葉が心に残りました。そのような方々に寄り添い、関わっていくことで分かることもあるので、実習などでも患者さんに寄り添い、何が必要なのかを考えていけるようにしたいです。

２年　③

当時、ハンセン病によって多くの人が差別を受け、人間としての死とされるような扱いを受けていたと知り、とても心が痛くなりました。しかし、当時の人々は、それでも自分の実存を確認するため、自分の生の痕跡を残すため、差別と闘うために、様々な文化・芸術を営み、素晴らしい作品が今でも残っていて、こうして語り継がれていることがすごいと思いました。文化・芸術作品には、当時の人々にしか表現できない思いや、願いが込められていると思いました。私たちにできることは、ハンセン病によって多くの人が差別を受け、苦しんできたということを理解し、今後繰り返さないように一人ひとりが平等な心を持ち、一つひとつの問題に向き合っていくことだと思いました。一日でも早く差別のない世の中になってほしいと思いました。